

と学問の発展史として読むことができる。そのリアリティの価値は将来にわたって燦然たるものとして残るだろう。

(瀧澤 利行)

(学会出版センター、東京都文京区本郷六―二―一〇、電話〇三―三八―四―二〇〇一、上巻平成十三年三月二〇日、四六判、六六〇頁、本体七〇〇〇円、下巻平成十四年六月五日、四六判、六六四頁、本体七〇〇〇円)

石塚久郎、鈴木晃仁 編

『身体医文化論―感覚と欲望』

面白い論集が誕生した。医、身体から喚起される豊穡なイメージを、英文学、英国ルネサンス演劇、英国史、表象文化論といった、いわゆる文系育ちの若い頭脳が、枠を越え多様な視点から自由自在に料理してのけていく。もちろん、医学史、科学史、比較神経解剖学と理系にも関わる分野を専攻する研究者たちも参加しているが、ごく少数にすぎない。

『身体医文化論』という新しい言葉を表題に掲げた、この論集の誕生の背景には、一九八〇年代以降の欧米における「医学史」に向けられる眼差しの変容と、英国に長期間留学し、英語・日本語どちらをも自由に駆使して活発に議論を交換しあい独自の論を構築していける一九六〇―七〇年代生まれの若い研究者たちの、集団としての華々しい登場がある。

彼らの集団としての活動の場である「身体文化研究会」は、慶応義塾大学の学事振興基金の助成を受け継続的な研究会活動をやってきた。この論集は、この研究会において二〇〇〇年度に「感覚と欲望」をテーマに発表されたもののうち15本のペーパーと石塚、鈴木による比較的長文の序章から構成されている。

文字通り多様な論考が並べられていて、この短い紙幅では到底すべてを網羅して論評を加えることは不可能である。せめて、表題を紹介しておきたい。

第I部、「十七・十八世紀―身体の神学と情念の劇場」には、次の四本の論文が収められている。小菅隼人「表れる内面―「ハムレット」に見る演劇の力」、那須敬「病としての異端―十七世紀内戦期イングランドにおける神学と医学」、鈴木晃仁「靈魂と身体の政治的メタファーの類型学―十七世紀の情念論を中心に」、石塚久郎「アプルガースの神経神学―靈的感覚と来世の身体」。

第II部「十九世紀―表象する医学・表象の中の医学」には、次の五本。横山千晶「見られる身体・診られる身体―解剖と女性の凶像学」、中村哲子「乳癌を病むドウラクル子爵夫人、そして女の欲望―マライア・エッジワースの『ペリンダ』(一八〇一年)をめぐる」、アルヴィ宮本なほ子「恐ろしき均衡―プロメテウスの創るロマン派的身体」、村山敏勝「メアリー・エリザベス・ブラッドン『医師の妻』―センセーションとプロフェッション」、上山隆大「感覚の治療と欲望の市場―

マッサージセラピーと十九世紀のセクシユアリティ」。

第三部「二十世紀―回帰の欲望と技術の夢想を超えて」には、次の六本。武藤浩史「一九〇〇年英国の身体なき声と声の身体―西洋近代における感覚的欲望の意味と系譜」、遠藤不比人「〈欲動〉の美学化とその不満―フロイト、ウルフ、不気味な身体としての〈歴史〉」、マーガレット小菅信子「〈戦死体〉の発見―人道主義と愛国主義を包擁させた身体」、萩原真一「オルダス・ハックスリーと単為生殖のデイス／ユートピア」、樽沼範久「フライトシユミレーター」のヴィジョン」、坪川達也「感覚と欲求―魚の脳から人間の脳まで」。

新しい世代を惹きつけている「医学史」と、本学会の多くの会員諸氏の了解しているであろう「医学史」との絶望的な懸隔が表題から浮かび上がってきたらうか。評者は、興味の赴くままに科学史・医学史と渡り歩いてきたこともあり、自己の問題関心と視野を特定の狭い領域に限定しないように努めてきたつもりなのだが、それでもやはり、こうした全ての論考に共感をもちつつ付き合うには、かなりの努力を要した。

一方で興味深い論考も極めて多く、一つだけあげるのには躊躇いがあるのだが、マーガレット小菅信子さんの「〈戦死体〉の発見」が実に面白かった。何十年前、ウィリアム・ハーヴィの事跡を求めて訪れたフォークストーンで何度も「Road of Remembrance」の急坂を行きつ戻りつしつ、戦死した若者を悼むモニュメントはなぜ第一次世界大戦のものか

圧倒的に目につくのだろうと不思議に感じたことがあったからだろうか。死者の身体に対して日本人は本来、欧米人とは異なる感覚をもつゆえ、臓器移植は日本では定着しがたいのだというような雑駁な議論を吹き飛ばす力を、この論考はもっている。身体感覚を伴って得た疑問を史料に基づき丁寧に解きほぐしていつてくれるような論考は、やはり面白い。

「身体文化研究会」の現在進行中の二〇〇二年度のテーマは「腐敗と再生」とのことである。本書の序章で編者たちの述べている「従来の〈医学史〉のもつ〈好事家たちの狭隘なかびくささ〉」の鋭い分析が提示されるかもしれない。その際には、この若い世代によって、再生の具体的な処方箋もあわせて語られることを期待している。

(月澤美代子)

〔慶應義塾大学出版会、東京都港区三田二一九―三〇、電話〇三―三四五一―三五八四、二〇〇二年五月二〇日、A5判、四六二×x v ページ、四八〇〇円〕

岡田 靖雄 著

『日本精神科医療史』

待望の一書である。わが国の精神科医療の歴史をこれだけの質と量で、単独の著者がまとめた書物は未だかつてない。この書物によってわが国の精神科医療の歴史研究はやっとス